

## 編集後記・編集部からのお知らせ



田中未来\*

Acta Epsilonica の Volume 1 はこれにて完結です。雑誌を立ち上げたは良いものの記事が集まらなくて早々にポシャったりしたらダサいなあと思っていたのですが、なんとかそれなりの質と量を維持しつつここまでたどり着きました。原稿の著者の方々や査読に協力して下さった方々に心より感謝いたします。

画家 Wilhelm Busch は詩人でもあったようですが、彼いわく、

父親になることは簡単だが、父親であり続けることは難しい

とのこと。雑誌を立ち上げることは簡単で、発行を続けていくことが難しく、そこに真の価値があるのかもしれませんが。

雑誌の編集というのはなかなか大変で、編集の方針を決めて原稿を集め、版面の構成を決めて L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のスタイルファイルを作り、送られてきた L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のソースファイルを正しくタイプセットできるようにして、誤字脱字がないかどうか確認して、句読点を統一して、page 番号を振って印刷する... ってこれもうほぼ本屋ですからね。L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X を愛している私でもさすがにちょっと疲れました。L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のスタイルファイルやデザインにいくつか問題があるように感じているのですが、そういった事情もあって今のところ無視しています。Volume 2 の編集が始まる前までには少しいじってみたいところで。さて、どうなるのでしょうか。どうなったかは

来たる Volume 2, Number 1 で明らかになるでしょう。

本号の表紙には佐々木惟子さんが撮影した紅葉の写真を採用しました。印刷して頒布しているものはモノクロ印刷ですが、Web にはカラーの表紙がありますので、ぜひそちらもご覧ください。

海外に目を向けると常夏の南の島や極寒の地あるいは砂漠などさまざまです。そんな中、季節の移り変わりに対して思いを馳せることができるのは日本人の特権でもあるように思います。いま私の職場の中庭では彼岸花が咲き、金木犀が薫っています。みなさんの周りの秋はいかがででしょうか。

普段こういった文章を書かないので、思いつくままに言葉を並べていますが、疲労感が見え隠れしているかもしれません。疲労ついでとってはなんですが、ご報告です。本号から編集委員に松川裕樹さんに加わって頂きました。前号までは私が印刷をしていたのですが、前述の通りちょっと疲れたので、手伝ってもらっています。

次回の発行は 2017 年の 1 月以降を予定しています。この秋にみなさんの実りが多からんことを祈って—

**主筆** 山下弘一郎

**編集長** 田中未来

**編集長補佐** 滝脇知也

**編集協力・美術監督** 久保田栄一

**編集委員** 佐々木惟子, 松川裕樹

\* Acta Epsilonica 編集長, 東京理科大学, optanaka (at) gmail.com.